

上田敏の米欧印象談

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

62

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

86

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2015-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021203>

上田 敏の米欧印象談

宮 永 孝

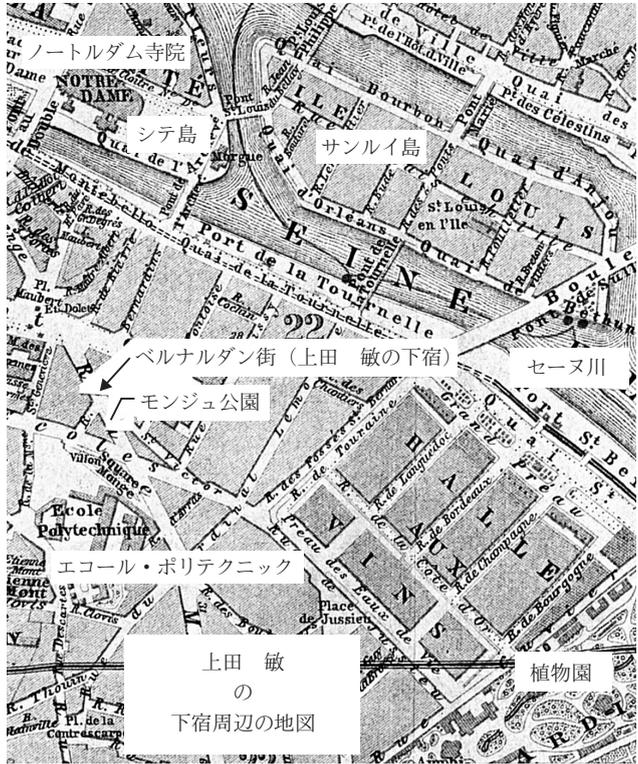
はじめに

- 一 文久三年（一八六三）の横浜鎖港使節
 - 一 上田 敏の洋行
 - 一 パリ生活
 - 一 小説家・永井荷風と会う
 - 一 風景論
- むすび

はじめに

明治四十一年（一九〇八）三月二十九日の早朝——北イタリヤより、パリのリヨン駅に着いた身なりのよい日本人がいた。その者は荷物を駅に
あずけると、駅前のあるカフェに入り、パンとコーヒーをたのんだ。これがその男のいつもの朝食であった。

やがて食事をすませると、馬車にのり、知人（石川という留学生）の下宿をたずねた。そしてその者といっしょに下宿屋を何軒かまわったのち、
有名な理工学校エコールポリテクニクのわきにある建物の四階の一室をかりることにした。家主の一家は、夫婦と二人の娘から成っていた。亭主はボルドーにブドウ園をもつ財産家のようなだった。まかない付の下宿であり、月二〇〇フランであった。部屋のまえには、樹木もある小さな公園があった。大通りアグニユにも近いし、ながめもよかった。



かいしゃした。

下宿生活にもすこしはなれた四月四日のこと、家主のおやじに連れられてパリ五区にある一六三五年創設の「ジャルサンテラント植物園」(七四エーカの土地に動物植物園、古代生物および人類学の博物館などがある)をおとずれた。二人はまず正門にちかい古生物・人類学に関する博物館(国立自然史博物館)に入り、巨象や巨竜をはじめ各種の動物の骨をみたのち、二階にあがると、人間の頭がい骨がガラスの戸棚のなかに無数にあった。

また片すみの棚には、着物すがたの日本人形がならんでいた。そこから数歩ほどはなれた所の柱に、チョンマゲに大小をさした日本人の写真帖(じっさいはガラスの額縁をたばね、縦に取りつけたもの。一枚ずつめくるようになってい)をみつけた。上田はそれをひとつずつめくって見ているうちに、

「乙骨 亘 十七歳。江戸の生まれ。大君の使節の一員」

家の者はしつけがよいばかりか教育もあり、親切であった。知人はもつと料金をふっかけられるかも知れぬ、と案じていたようだが、ひじょうに廉価であったので安心したようであった。

住所は――

Madame Modene!, 48 Rue des Bernardins

(モドネル夫人方 ベルナルダン街四十八番地)

であった。この下宿屋に入ることになった日本人の名は、上田 敏(びん)一八七四―一九一六、明治期の文筆家。当時、東京高等師範学校教授、のち京大教授)といった。

かれは詩・評論・翻訳、外国文学の紹介など、三面の大活躍をし、訳詩集『海潮音』(明治38年―1905年刊)はその美文をもって人口に



『世界紀行文学全集』（第1巻 フランス編，修道社，昭和34・9）の「月報Ⅷ」より。



明治40年（1907）シカゴで撮った写真。敏（35歳）。『上田敏全集』（改造社，昭和6・7）より。

と、フランス語の添え書きの付いた写真と出会い、びっくりした。

それはまぎれもない上田 敏の亡父の写真であったからである。案内人の家主のおやじも、思いがけない出会いにおどろいたようだった。

「家の人たち（家主一家）も奇遇に驚き居候、今回の旅行中最も驚くべき事かと存候」（敏の妻えつ子宛書簡、明治41・4・5付）。

上田 敏がここを訪れて二十余年後——昭和六年（一九三一）の秋——かれの娘・瑠璃（紺青色の宝石の意）子は、パリ滞在ちゅうのある日のこと、生前会うことのできなかった祖父（亘）の面影をみようと思つてジャルダン・デ・プラントを訪れた。

（こんな広い博物館で、はたして写真がみつけれらるであらうか……）⁽¹⁾

と、懸念をいだきながら、「国立自然史博物館」のなかに入った。細長い廊下のようなものが、四方の壁に沿つてつくられていた。二階にのぼり、柱のところで件の写真を発見した。敏は十五歳のとき、父・亘と死にわかれたが、瑠璃子も十五歳のとき、父・敏と死別しているのもふしぎである。また敏は四十三歳で亡くなっているが、娘・瑠璃子も四十三歳で奇しくも急逝している。

瑠璃子は、かつて亡父が立つて写真をながめたおなじ場所、死にわかれた父・亘の若き日の写真を偶然みつけたとき、父の感慨はどんなであったか想像してみた。彼女にとって帰国後、このことを語るべき父がいらないのはさみしいが、幸い父のそのときの経験を知っている母・えつ子は健在だし、敏の叔母（桂川悌子）も、雑司谷に存命ちゅうであった。

敏がジャルダン・デ・プラントで偶然みつけた父・亘の写真は、何種類もある。



左から妻・悦子、娘・瑠璃子、上田敏。

一枚は単物ひとえもの（二重で、裏のつかない和服）を着、袴はかまをはき、左手には大刀を、右手には洋書を持ち、ちょうネクタイをし、イスにすわっている写真。

もう一枚は横むきのもの。

ほかに羽織・袴に大小を腰にさし、左手にかぶり笠をもった等身の写真も、定役・杉浦愛蔵（二十五歳）の遺品のなかに一枚残されている。

一 文久三年（一八六三）の横浜鎖港使節

敏の父・乙骨 巨（一八四四？〜一八八八、明治期の下級官吏）は、儒学者・乙骨

耐軒たげん（昌平黌の助教、甲府徽典館きてんかんの学頭）の次男として生まれ、文久三年（一八六

三）横浜鎖港使節・外国奉行池田長発ながはつき一行に、小遣・理髪師として随行した。帰国後、上田家の養子となり、名を綱二けいじとあらためた。維新後は開拓使や土木局、内務省などにつとめた。⁽²⁾

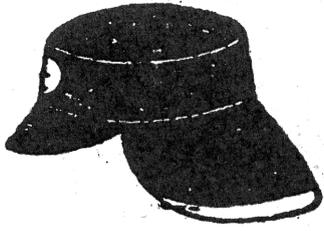
幕府は、孝明天皇の勅旨と攘夷派らの圧力に屈し、文久三年五月十日（一八六三・六・二五）をもって、攘夷を実行する日と定めた。が、天子のみ心をなぐさめ、一時ふっとうしている攘夷論をひやすため、あらたに開いた神奈川（横浜）をいったんとざしたいと思った。イギリス、アメリカ、オランダ公使らは、幕府の提案に強硬に反対したが、フランスのベルクール公使だけは、好意的な意見をのべ、本国のナポレオン三世に直接使節をだし、たのんでみれば解決のみちも開けましょう、といった主旨の発言をしたので、鎖港の使いが出るようになった。

幕府としても、鎖港などとてもできないことぐらい百も承知していたが、朝旨遵奉の一端として、幕府の義務をつくすのも悪くはない、と考えたようである。鎖港使節団一行は、フランス公使館付通訳ブレックマンをふくめ三十五名から成っていた。一行は三使節――、

正使……………池田筑後守（二十八歳）

副使……………河津伊豆守（四十四歳）

目付……………河田相模守（三十歳）



使節および従者は、外出するとき、
“冠りもの”（帽子）を用いた。乙骨
のように御目見以下（将軍に直接会
えぬ身分）の者は、一本線の入った
ものをかぶった。

らのほかに、外国奉行支配組頭、勘定格調役、通弁御用頭取、目付、定役、従者ら二十九名がくわわり、小者（雑用をするしもべ）として、

小遣……………青木梅蔵（年齢不詳）

理髪師……………乙骨 亘（十七歳）

らが参加した。

江戸のフランス代理公使兼総領事レオン・ロッシュが、本国政府に送った *Liste de l'Ambassade japonaise*（日本使節団のリスト）には、士官の
氏名・肩書が出てくるが、身分のひくい者の名は報告されていない。Domesticite（召使の身分）の者は、計十四名とある。⁽³⁾かれらの役割は、

Valets de chambre
ヴァレ・ドゥ・シャーンブル

（下男）

Cuisiniers
クィズィエール

（料理人）

Barbiers
バルビエール

（理髪師）

だという。乙骨の名をさがしたがなかった。

一行は文久三年十二月二十九日（二八六四・二・六）、フランスの通報艦「ル・モンジュ」号に
のり、横浜港を出帆した。これはとにかく小さな軍艦であった。乗組員のほか、ひとりも便乗させ
る場所がなかった。使節の上役を容れる部屋がないので、艦尾に羽目板を張って居室をつくったが、
下級の役人も同居するありさまであった。

従者、小遣になると、居室はなく、糧食を積んだ船倉に、旅用の荷もつを平らにならべた上に杉
板をしき、その上で毛布にくるまって起臥した。おまけに食事も上海までひどいもので、――

水夫にあたえる大きなビスケット

牛の頭の丸ゆで（おかずの代り）

などが出た。牛の頭は、ナベのまゝ、出され、水夫が腰にぶらさげているナイフを借りて、それで顔や頭のまわりの肉をけずり取ってむしゃむしゃ食うというありさまで、餓鬼道の図柄のようであったという（田辺太一従者・三宅 秀の談話）。

水はもらって飲めたが、乗組員が多いため、じゅうぶんではなく、食事のときすこし白湯（何もまぜない湯）を飲むことができた。万事が不自由であったから、上田 敏の父も辛苦にたえねばならなかったであろう。

旅行中は洋服は禁制であり、お国風を守らねばならず、服装はみぐるしからぬようにせよ、との達しが出ていた。が、じっさいは、フランス到着後、秘かに洋装の写真をとった者もいる。髪は半髪（月代のある髪）または惣髪（月代をそらず、髪をのばし、頂てたばねて結んだもの）であった。

三宅 秀は、「使節などは其随行の従者中に髪結ひ髻剃（ひげをそる）の出来るものをつれて居たやふでした」と語っているが、乙骨豆のことをいっているのかも知れない。

その後の一行の旅程をしめすと、つぎのようになる。

一八六四・二・一四…………… 上海に到着。メッサジュリ・アンペリヤルの仏郵船「リダスブス」号に乗りかえた。

二・二二…………… 出帆。

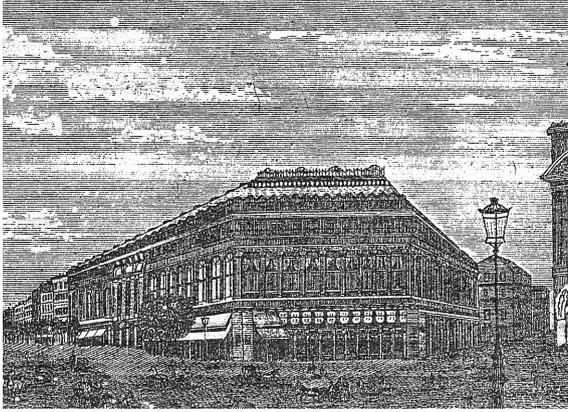
二・二四…………… 香港着。「アルフェ」号に乗りかえた。

二・二七…………… 香港出帆。

のちサイゴン、シンガポール、セイロンを経て、インド洋に出、アデンに寄り、紅海をさかのぼり、

三・二五…………… スエズに上陸。当地より別仕立ての汽車でカイロにむかった。

四・四…………… 一行はギゼーのピラミッドやスフィンクスを見学した。このとき写真師フェリックス・ベアトがスフィンクスを背景とし



日本使節団のパリの旅宿「グラントテル」。

た使節団の写真をとった。

カイロから汽車でアレクサンドリアに出た。

四・九…………… 仏郵船「ラ・ペルーズ」号にのり、マルセイユをめざした。

一八六四・四・一五…………… 午後三時——マルセイユのジョリエット岸壁に到着。市長以下、将官、騎兵らの出迎えをうけた。

(陰曆三・二〇)

その後、一行は旧港にちかいカヌビエール街の七階建のホテル——後年の「オテル・デュ・プティールブル」に旅装をといた。

四月二十日の朝——マルセイユを汽車で出発し、パリを目ざした。が、同行の御書役・横山敬一は、折からの病氣(黄熱病、エジプトでかゝる)のため出発ができず入院した。このとき乙骨 亘は、付き添い人としてホテルに留めおかれた。これが一行と横山の永き訣別となった。

横山が亡くなったのは元治元年三月二十一日(一八六四・四・二六)の夜十一時すぎのことだが、その病状は、電信をもって毎日使節のもとに伝えられた。使節一行がパリのリヨン駅に着いたのは、四月二十一日(陽曆)の午前八時ごろであった。直ちに馬車でオペラ座のちかくにある「グラントテル」(カンプシーヌ街)にむかった。ホテルでは窓に「日章旗」をかかげ、日本使節の旅宿であることをしめした。

「グラントテル」は、部屋の数が七五〇もある大ホテルであった。

四・二七…………… 横山危とくの報に接したパリ在住の使節は、見舞いのため目付、同心、小遣ら四

名をマルセイユに派遣した。かれらは葬式をあげ、墓の碑文——

「横山信道之墓

筑後守池田発書」

を用意しておもむいた。

横山は見舞い客と会うこともなく、前夜息をひきとった。



横山敬一の墓を訪れた池田筑後守の従者たち。
『ル・モンド・イリュストレ』より。

四・二九……

遺体はマルセイユ郊外「サンピエール墓地」にはこぼれ、正門に
ちかい墓地正面右側三区（二坪の地）に葬られた。埋葬地は、使
節名代・須藤時一郎（三十二歳）が、市の書記ファマンとともに、
二、二五五フラン払って求めたものである。

いま碑文は消えてしまっているが、横山家の紋「丸に卍」^{まんじ}だけはみることができる。
パリ滞在中、日本使節はナポレオン三世（一八〇八〜七三、一八五二〜七〇在位、
ナポレオン一世の姪の第三子）により、兵二万からなる調練を見物したり、セーブル
（パリ郊外）の磁器工場、電気機械工場、ヴェルサイユ宮殿、シエルブール軍港、博
物館・公園・ナポレオン一世の墓・廃兵院・オペラ座・ヴァンセンヌ城などを訪れた。
使節団の団員は、パリ滞在中、自由行動はゆるさなかった。一人で外出はで
きず、外出するときは、同行者が二人以上でなければならなかった。市内はガス灯が
ともっていたから、昼のように明るい感じがした。ホテルにおける従者や小者の生活

ぶりについては、わからぬことが多い。が、ともあれ、かれらは三度の食事をとるとき、ホテルの地下室へいった。そこはガスのにほいがし、は
じめはそのにほいが鼻についたが、やがて慣れてきたという（三宅 秀談）。また士官のうち年少のものは、⁽⁴⁾フランス語のレッスンをうけている
が、この中には小遣の乙骨 亘や青木梅蔵は入っていないようだ。

さて肝心なフランス政府との鎖港交渉についてのべると、五月、六月の二ヵ月のあいだに、秘密会談をふくめて七回交渉がおこなわれた。が、
当初の日本側のあまい期待に反し、フランス側はあくまでも条約の履行をもとめ、鎖港にはぜったい応じない、といった。もし条約を破るような
ら、軍艦を差しむけると恫喝した。池田全権らは、談判の経過からみて、とても使命をまっとうできぬと判断し、六月二十日「パリ約定」（仏軍
艦砲撃の賠償、関税の割引きなど）をむすんだ。翌日マルセイユにむかい、そこから英船「オンクセント」号にのり帰国の途についていた。

使節一行は、元治元年七月十八日（一八六四・八・一九）横浜に帰着した。三使節は、使命を果さなかったかどで、それぞれ処分を受けた。池田は蟄居のうえ半高（はんたか）（禄を千二百石から六百石に減じられた）、河津は閉門、河田は逼塞（ひっそく）となった。

一 上田 敏の洋行

洋行とはなにか。この語は中国では「ヤンハン」といって、外国人の商店を意味する。が、わが国では西洋に行くこと、欧米に渡航、留学する意である（『国語大辞典』小学館）。いまわれわれはこの語を耳にすることはほとんどなく、もう死語にちかいのである。

洋行ということばそのものは、いまや明治・大正・戦前（第二次世界大戦がおこるまえ）を連想させる古めかしいものになりつつある。

いずれにせよ上田 敏が、米欧漫遊の途にあがったのは、明治四十年（一九〇七）十一月二十七日のことであった。時に上田は三十四歳。このときから七年ほどまえにさかのぼった経歴をみると、左記のようになる――

明治32年（二十六歳）……高等師範学校教授。高等官七等。

明治35年（二十九歳）……仏教高等中学教育嘱託。

明治36年（三十歳）……東京帝国大学文科大学講師嘱託。

明治38年（三十二歳）……明治大学出講。高等官四等。訳詩集『海潮音』出版。

高師が専任教で、あとはすべて非常勤講師であった。この間にさかんに著述活動もしているから、忙しい日々を送っていたはずである。

しかし、そんなに多忙の身が、なぜ急に外国に出かける気になったのか。それには就職問題がからんでいたようだ。すなわち、漱石のあとがまとしての東大入り（⁵）もしくは京大入り。いずれ帝大の教授に就任できるものとすれば、欧米の風物や人情（⁶）――ヨーロッパ諸国の事情に通じておかねばならぬ。すなわち洋行して“箔”（外部をかざるもの）をつけておく必要があった。

上田は京大教授に就任した翌年、鷗外に宛てた書簡（明治43・2・1付）において、就職運動らしきことをやったことはないし、誰にも仲に立



京大総長・岡田良平

って取りもってもらったこともなかったと明言している。が、人を通じ、あるいは直接多少の接触はあったようである。洋行の理由は、いろいろつけることが可能であったろう。高師のほか、東大や明治その他の学校で、語学教授に時間をとられ、文学のための精力をそがれ、また気分転換のため、さらに生活に変化をあたえるため、欧米漫遊をくわだてたという。

真意をつかむことは容易ではないが、ともあれかれは、私費をもって外遊の途にあがるのだが、出発の二日前——十一月二十五日、上野の精養軒(8)において送別会がひらかれ、五、六十名が参加した。そのなかには森鷗外、島崎藤村、夏目漱石、馬場孤蝶ら文壇の名士の顔がみられ

た。

横浜の出帆は十一月二十七日のことだが、その前日に京都帝国大学総長・岡田良平（一八六四〜一九三四、明治期の教育行政家、寺内内閣の相）と会い、京大入りを打診された。このときとっさのことで、ふかく考えるひまはなかったというが、

（閑かんをえ、文学に従事し、専門の英文学を教えてみたい）

とおもい、その旨先方につたえ、観光の途にあがったという（鷗外宛書簡、明治43・2・1付）。

京都行は、内心うれしくなかった。東京にもどる意志がつよく、京大は腰かけのつもりであったようだ。同行者は小林文七（一八六一〜一九二三、明治・大正期の画商）。かれは浮世絵の収集で知られ、その販路を海外にもとめるのが目的であった。(9)

ところで、当時船で欧米にゆくととなると、ばく大な金があるが、その費用はどこから出たのか。またかれは海外でどのような生活を送ったのか。

上田は専任校の東京高等師範学校の教授としてもらっていた年俸は、八百円であった。明治三十年ごろの年俸八百円は、豪勢なものであったという。当時の大学生は、毎月六円から八円ぐらいで生活していた。保科孝一（一八七一〜一九五五、明治から昭和期の国語学者。のち東京文理科大学教授）は、東大の助手のときの年俸は、二百円。毎月十七円ほどでくらしていたという。独身だったから、この月給でじゅうぶんやってゆけた（保科孝一『ある国語学者の回想』朝日新聞社、昭和27・10）。

年俸八百円の上田は、毎月七十円ほどでくらしていたが、召使をやとい祖母と母親のめんどうをみななければならなかった。高師の俸給のほかに非常勤の講師料が入ったはずであるから、余裕のある生活ができたはずである。しかし、長期にわたって私費で外遊するととなると、物入りである。

東京高師のほうは「休職給」がもらえたとしても、非常勤校からは給金を支給されない。のちに京大より月に百五十円ほどの留学費が出ることになるが、これはかならずしも潤沢とはいえず、帰国をいそぐ理由となった。

しかし、じゅうぶんな資金をもたぬ上田に福音がやってきた。浮世絵の輸出をあつかう小林文七が、かれの資金援助をしたと考えられる。小林は明治二十年代中ごろより、古錦絵（浮世絵）の商人として、東京と横浜に往復し、外国人に売り込んでいた。横浜本町三丁目に店をかまえていた（石井研堂『明治事物起原』）。

明治四十年（一九〇七）十一月二十七日——上田と小林は、アメリカの蒸気船「シベリア」号（五六五五トン、船長A・ゼーター）にのり、アメリカのサンフランシスコをめざした。かれらは「特別二等」の船客であった。『ザ・ジャパン・ウィクリー・メール』紙（一九〇七・一一・三〇付）の「出発した乗客」欄に、二人の名前をみる事ができる。

Per American steamer *Siberia*, for San Francisco Via Honolulu : (中略)

Mr. B. Kobayashi

Mr. B. Ueda

アメリカの蒸気船「シベリア号」で。ホノルル経由でサンフランシスコにむかう。

B・コバヤシ氏

B・ウエダ氏

上田は出発に先だって文部省より、欧米における「英語教授法取調」を囑託され、休職を命じられた。⁽¹⁰⁾ アメリカまでの航海のようすは、妻・悦子宛の手紙が如実にしめている。横浜を出帆し、犬吠埼（千葉県の太平洋に突きでた岬）の灯台をはなれてから、見えるものといったら、海と空だけであった。シベリア号は、一日平均三六〇マイルの速度で進んだ。上田にとってははじめての船旅であり、あまりのおもしろさに、船酔いはしなかったという。

ごちそうや果物はふんだんに出るし、毎日甲板のうえを散歩したり、あきるとタバコを吸ったりした。やがて船客らとことばをかわすようにな



ニューヨークのプロロードウェイ

った。船がだんだんホノルルに近づくようになると、すこし汗ばむようになり、また海の色がサファイア（るり色——紫がかった紺色）に変わってきた。

十二月六日…… 午前八時ごろホノルルに到着。

十二月十二日…… 午前八時ごろ、サンフランシスコに到着。

船は金門湾に入ると、検疫や税関の手続きをうけた。それがすむと、午後二時半ごろ、馬車にのり、サンフランシスコの一流ホテルのひとつ「セント・フランシス」（四五〇室、パウエル街とユニオン広場が交差するところ）にむかい、そこに旅装をといた。上田の部屋は、三一七号室、小林は三二三号室であった。市内を散歩してみたが火事の跡あとであったから、あまり見るものがあった。一晚泊って、——

十二月十三日…… サンフランシスコを午前十時ごろ汽車で出発し、オークランド（サンフランシスコの東三〇キロの町）にむかい、それより雪のつ

もったシエラ山脈をこえ、シカゴを目ざした。

十二月十八日…… シカゴ到着。

シカゴでは見世物、映画などを見、とくにおもしろかったのは夜景であった。またスケートをする子ども、ソリにのる夫婦らを見た。暮れも押しつまった、

十二月二十八日…… ニューヨークに着いた。

宿を「ホテル・インペリアル」と定め、そこに投宿した。ホテルの前はブロードウェイ（南北の大通り）、うしろは五番街（ニューヨークの繁華街）であった。大晦日は教会の鐘の音をきき、新年はセントラルパーク（マンハッタン島の中央部にある公園）へいき、動物園や池をみ、美術館に寄り、写真で知っていた名画をみた。夜はメトロポリタン・オペラ劇場で、ワグナーの「トリスタン、イゾルデ」を観た。

上田は日本を出てから、日本人として、大国民のひとりとして、外国人にひけをとることなく、堂々と旅をつづけてきたという。高級ホテルに滞在したから、不愉快を覚え、あつかいもよかった、と妻に書き送っている。朝は七時ごろ起き、夜は八時から十時のあいだに寝た。

明治四十一年（一九〇八）一月十七日……夕方、ホボーケン Hoboken の埠頭から、ハンブルク・アメリカ航路の新造船「ブリウヘル」号（二二〇〇

〇トン）に乗込んだ。

一月十八日…… ニューヨーク出帆。

冬期にめずらしく、大西洋の航海は、おだやかであった。

一月二十七日…… シェルブール（フランス北西部の港町）に到着。

午後二時半ごろ、汽車でシェルブールを出発し、パリにむかった。田野や草木はアメリカで見たものと異なっていたが、日本の風景をおもいだし、まだパリをみないのに、この国が好きになりそうな気がした。

夜十時ごろ、パリのサン・ラザール駅に着いた。馬車にのり、十分ほどゆられ、「グラントテル・デュ・ループル」（パレロワイヤル広場、リボリ街）にいたり、そこを旅宿とした。ここも一流ホテルであり、上田の部屋は二階の一室、窓のまえには有名なループル美術館があった。

二月二日…… 印象派のアルフレッド・シスレー（二八三九〜九九、フランスの画家）の展覧会に出かけ、大いに得るところがあった。

二月三日…… バジル・ホール・チェンバレン（二八五〇〜一九三五、イギリスの日本学者、東大で教鞭をとった）の紹介状により、サロンにおいてアナトール・フランス（二八四四〜一九二四、フランスの作家）や各界の貴婦人らに会うことができた。

上田と小林が泊った「グラントテル・デュ・ルーブル」は、パリの一流ホテルのひとつだが、かれらはどのようなものを口に入れたのか。そのメニューをのぞいてみよう。

上田は朝、六時半か七時ごろ起きると、フロに入り、そのあと食堂へいった。

朝食（二フラン＝邦貨八〇銭）—— 大きな茶わんにコーヒーとミルクが入ったもの（カフェオレ）とパン。

昼食（五フラン＝邦貨二〇円）—— （前菜） いわし、冷たいじゃがいも、芝エビのつくだにのようなもの。

（お好み料理） カキやカレイ、オムレツ、肉類、野菜、チーズ、果物。ブドウ酒の小ビン。食後、カフェオレまたはリキュールをすこし飲む。

夕食（六フラン＝邦貨二四〇銭）—— スープ、魚または肉料理。野菜。ブドウ酒の小ビン。食後、菓子またはアイスクリーム、チーズ、果物。

食事は、毎日のようにぜいたくをしたという。部屋代は一日二十八フラン（邦貨十二円）であった。

二月四日…… 姉崎正治（まさきはる二八七三〜一九四九、明治から昭和期にかけての宗教学者、東大教授）と会い、ホテルでごちそうしてやった。

二月五日…… 姉崎の下宿で、返礼のごちそうになった。寄席を見物したり、高級カフェに入り、ビールをのみながら閑談した。同人とは二回会った。

この間、ホテルのそばのルーブル美術館、ノートルダム寺院を見物したり、夜はヴィルヘルム・リヒャルト・ヴァーグナー（二八一三〜八三、ドイツの作曲家・楽劇の創始者）のオペラ「ローエングリン」などをみた。

またパリにはカフェと称する喫茶店（軽い食事ができ、酒ものめる）が至るところにあり、それは街頭にイスをだし、大理石の小さなテーブル

をならべていた。往来をいく人や馬車をながめながら、カフェや酒がのめるのはパリの特性であった。そこでは、邦貨で二〇銭も使えば一時間ぐらいはねばることができた。

パリも外国人も、午後五時ごろから夜半まで気がるにくつろげるところであるが、怪しい女も出没する場所でもあった。安く、おもしろく夜をすごせるのがカフェであった。上田は小林とよくそこでのんびりと時をすごした。

二月二十日…… 午後三時ごろ、ホテルを出、北駅からブローニュ（別称ブローニュ＝シュール＝メール——パリの北北西二四二キロ）へ直行し、そこから船でイギリス海峡を渡った。

夜十二時ごろ、ロンドンの「ザ・ファースト・アヴェニュー・ホテル」（一八八三年＝明治16年ホルボーンにおいて開業し、一九四〇年＝昭和15年ドイツ軍の空襲によって焼失した）に投宿した。

二月二十一日…… 馬車にのって絵をみにいった。場所は不明。

二月二十四日…… 上田は小林とともにマーチン・ホワイトという金持の家をおとすれ、カクテルをごちそうになった。それよりロンドン動物園へ案内され、サルやクマやライオンなどをみた。

ついでロンドン塔をおとすれたが、漱石の訪問記をおもいだした。

ホテルからセント・ポール大寺院の鐘の音がよくきこえた。

二月二十六日…… 夕方荒波のドーバー海峡を渡り、オーステンド（北海にのぞむ港町、ブリュッセルの北北西二一五キロ）にいたり、そこから汽車でブリュッセルにむかい一泊した。

二月二十七日…… 午前四時、アムステルダムにむかい、夜十時ごろ中央駅に着いた。

二月二十八日…… 昼間、阿姆斯特ダムの市内や美術館を見学し、夕方汽車（寝台車）でベルリンへむかった。夜、九時ごろ国境に着き、税関の検問をうけたのち眠りについた。

阿姆斯特ダムは、変わった風俗の市であり、市内は清潔であり、一風変わった建物や運河が多いのに感心した。

二月二十九日…… 朝、ふと目がさめたら、外は雪がふっていた。アメリカ以来はじめて雪を見た。午前七時十五分——ベルリンのフリードリヒシュトラッセ駅に着いた。

雪のなかをウンター・デン・リンデンの西端をよこに、公園にそって馬車を走らせ、ケーニヒグレッツァー街の角にある「ベルビュ・ホテル」に着き、ここを旅宿とした。

さっそく食堂にいき、朝食をすませたのち喫煙室に入ると、日本人が三人いた。

工学士 吉野又四郎（二八七〇〜？、東京帝大工学部機械科の出身） 南満州鉄道の創業のとき要職につき、欧米に出張。のち実業界に投じた。

〃 福井某

京都工芸学校

〃 氏名不詳

三月一日…… 朝、動物園テイアールガルツを見物し、午後はビスマルクの像、議事堂、美術館などをみた。それよりウンター・デン・リンデンをぶらぶら歩いた。そのときドイツ皇帝ヴィルヘルムの自動車が出てきた。市民は帽子をふっていた。

三月三日…… ホテルから二十五分ほど馬車にのり、ブラアガア街二十五番地に住む桑木巖翼イサトキ（二八七四〜一九四六、明治から昭和期の哲学者、京大教授）と新村 出いず（一八七六〜一九六七、明治から昭和期の言語学者、東大助教授）と会い、歓談した。

桑木は上田の京都市に大賛成であった。

上田の京大内定の報は、在ベルリンの京大留学生のあいだでも知られていた。桑木の寄書の文句は——、
「××大学××××」
であった。

『上田敏全集』補巻では、伏字になっている。

が、これは「東京大学ザマヨミロ」⁽¹⁾とよむそうである。

三月六日…… 午後一時二十分の汽車でベルリンを発し、北ドイツの平野、地平線の森などをみながらドレスデンにむかい、当地には四時十二分に着いた。直ちに「グラント・ウニオン・ホテル」に投宿した。市内見物をしたが、絵画や建物にみるべきものが多かった。

朝、ガイドとともに馬車で、王宮・宝庫・教会・博物館などを見学した。

三月七日…… ドレスデンを発し、オーストリアのウィーンにむかった。

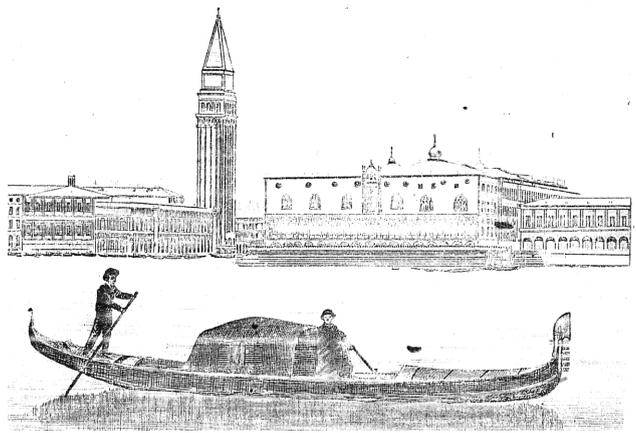
三月八日…… 朝、ウィーンに着き、「ホテル・プリストル」(一流ホテル)に投宿。ガイドとともに市庁・大学・博物館・美術館・教会・公園などを見学した。とくにベラスケス(一五九九〜一六六〇、スペインの画家)の作品に感心した。

三月九日…… 朝、ヨーロッパ最上の汽車(オリエント・エクスプレス)でウィーンを発し、ミュンヘンにむかった。途中、車窓より雪の山、田野、湖水など、南ドイツの風景を堪能した。

バイエルン州の州都ミュンヘンの「ベルビュー・ホテル」で一泊したのち、雪のチューリヒ(スイス北部の町)にいたり、湖畔のホテルに投宿した。

ドイツの都会についていえば、ミュンヘンは趣味ある建築に富み、ドレスデンはこれについてだという。いちばん味わいがなかったのは、ベルリンであった。

三月十日…… この日、船でポーデン湖(長さ七十四キロ、幅十四キロ、ドイツ・スイス・オーストリアにまたがる湖)を遊覧した。



ヴェネチアの風景

三月十二日…………… 午前七時十分発の汽車でチューリヒを発し、雪のアルプスを越え、午後

三時ごろミラノ（イタリア北部の町）に着いた。夕方、汽車でヴェネチアにむかった。宿はゲーテも泊ったという「ホテル・ヴィクトリア」であった。

上田は、ドイツ、スイス、イタリアと駆け足の旅をつづけながら、行く先々で日本の留守宅に報告をつづけた。ミラノでは市内を遊覧し、有名な聖堂ドゥオモを見学した。

三月十三日…………… ヴェネチアで一夜明かし、ゴンドラにのり市内を見物し、貧民窟などを探った。この水の都は、奇妙なところだと思った。

ヴェネチアから汽車で南下し、トスカナ州の州都フィレンツェ（ローマの北北西二七七キロ）にむかったのは、三月十四日のことか。このころになると、だいぶ旅のつかれが出て

きたようである。「オテル・ミネルバ」に投宿。

三月十五日…………… 朝、馬車にて、市内および郊外をのこらず見学した。のちフィレンツェを一望できる丘陵の上にのぼった。この街は美術の宝庫でもあるが、数年逗留せねば研究はむずかしいと思った。

フィレンツェを発し、ローマへむかったのは、三月十七日であった。

三月十八日…………… 法王庁があるサン・ピエトロ寺院を見学した。

三月十九日……夜、ナポリ（イタリア南部。ローマの南東二二〇キロ）に着き、「コンティネンタル・ホテル」に投宿した。

上田は三月十九日より同月二十七日まで、およそ一週間ナポリに滞在し、この間に――

ベズービオ山（ナポリの南東二三キロにある活火山）

カプリ島（ナポリ西部の観光・保養の島）

ポンペイの遺跡（ナポリの南島二三キロ。ローマ貴族の別荘地・保養地として発展したが、紀元前七九年にベズービオ山の噴火で埋没した。十八世紀に発見された）

などをおとずれた。上田は三月二十三日にトマス・クック社をおとずれ、パリの日本大使館から公用の書簡が届いていなかった。京都帝国大学総長・岡田良平より、

書簡一通

電報一通

が来ていた。岡田の文面によると、文部省の内規により、一年以下の留学は許可にならないので、形式上二年とし、貴殿から留学期限の短縮を申し出たばあい、すぐに許可になるという。

そこで上田は、九月までに短縮することに決した。電報のほうは、大学のために書物を八百円ほど購入してほしいとの要請であった。またギリシャ行は許可できぬとのことであった。

三月二十七日……午後三時、ナポリを発し、ローマにむかい、ここで汽車をかえた。同夜、寝台にのり北上し、トリノー（イタリア北部の町）にむかった。

三月二十八日……朝、十時ごろトリノーに到着。十二時まで街を見物し、その後駅のレストランで昼食をすませ、ふたたび車中の人となった。そ

れよりフランスにむかった。

国境のモダーヌ（フランス南東部、パリの南東六四一キロ）に着くころ、家にもしびがみえた。汽車はさらに走り、シャンベリー（フランス東部、パリの南東五三六キロ）に着いた。汽車はここで数時間停車したので、駅舎で夕食をすませた。やがて客車にもどり、眠りについた。

三月二十九日（日曜日）…… 午前七時すこしまえ、汽車はパリのリヨン駅に着いた。

上田のその後の行動は、本稿の冒頭にしるしたように、朝食をとり、そのあと知人（石川という人）とともに下宿さがしをしたことである。午後、セーヌの河岸の古本屋を冷やかし、夜九時ごろ床についた。

三月三十日…… 朝、荷物のごとでリヨン駅にいき、午後は日本大使館におもむき、手紙などを受けとった。

一 パリ生活

上田にとってヨーロッパ滞在ちゅう、さいごにもっとも長く滞留したのはパリであった。明治四十一年（一九〇九）三月二十九日から同年九月上旬まで約半年間パリですごした。それはホテル住いならぬ下宿生活であった。一月下旬、はじめてパリに着いたときは、セーヌの右岸にある一流ホテル「グラントテル・デュ・ルーブル」であった。が、こんどは左岸の「学問町（カルチェ・ラタン）」へ移り、学生の生活をはじめたという。そこは下情（かじょう民衆の実情）を知るにはもっともふさわしい所であったという。

新しい住いと家主一家および下宿人について、くわしくのべてみよう。

下宿屋は、ベルナルダン街 Bernardin 四十八番地にあった。家の前には、モンジュ Monge という小公園があった。そこにフランス中世随一の詩人——フランソワ・ヴィヨンの像があり、毎日ながめることができた。この公園のそばにエコール・ポリテクニクがあった。上田の部屋は四階（日本の数えかたで五階）にあり、バルコニー付であった。部屋にはベッドと洗面所、タンスがあり、そのとなりはサロンと呼ばれる食堂であ



モンジュ公園とヴィヨン像

った。

家主の家族は――、

主人…………… 六十五、六歳くらいの老人。もと軍人。二、三年前にポルドーのシャラントから家族とともにパリにやってきた。故郷にはブドウ園があるといい、財産家であった。
妻…………… 五十歳台。下宿屋は細君の内職であった。
長女…………… 名は、モデット（十六歳）。これも下宿屋（女性用）をやっている細君の妹の家におり、ときどきやってきた。
次女…………… 名はアンニイといった。

下宿人は上田以外にもう一人いた。

法学部の学生…………… 名はフェデリゴ・アルヘルト・ブリッド（二十四歳）。パナマの知事の息子であった。

上田によると、『下宿屋』というと、日本ではあまり体裁がよくないが、フランスではなかなかのもので、けっして下等なものともみないという。家主夫妻の親類や知人に相当なひとがいたという。

へや代はまかない付で、月二〇〇フランであった。上田の留学費は、月百五十円。すなわち三七〇フランであった。かれは残りの一七〇フランでやりくりせねばならなかった。

上田の日常生活はどうであったのか。どのように日々をすごしたのか。

朝は八時ごろ目をさました。呼び鈴りんをならすと、コーヒー、ミルク、バター、パンなどが運ばれてきた。朝食をベッドのなかでとった。そのあと、顔をあらひ、洋服を着れば、九時になる。そこで用がなければ散歩に出る。

外に出て、キオスク（売店）で新聞を買い、セーヌ川岸の古本屋をひやかし、リュクサンブール公園を一周し、家にかえるとお昼ごろになっている。ホテルに逗留していたときは食べすぎたが、下宿ではちょうどよいあんばいの量である。昼の献立は、つぎのようなものだった。

スープ パン 野菜もの 肉一種

チーズ 果物など。

飲物としては、ボルドーにある家主の畑でとれたブドウから造った白ワインを水でうすめたものを、一、二杯のんだ。

午後はどうすごしたのか。

午後も朝のように川岸の古本屋ブキニストをひやかしたり、リュクサンブール公園をぶらついたりした。また博物館や美術館をおとずれたり、セーヌの川船にのって遠くにいったり、乗合馬車の屋根にあるイスにすわって市内見物したりした。

夕食は午後七時であり、このときも昼とおなじように白ワインを水で割ったものをのんだ。夕食後、用事がないときは、すこし読書をして床にいたり、音楽会に出かけるときもある。パリの夜十一時、十二時ごろは、まだ宵の口なのである。すこしおもしろいものを見ようとするとき、十一時ごろからでないためなのである。

上田にとって滞欧ちゅういちばん心地よく、おもしろかった時候は、晩春から初夏にかけてであった。初夏のパリの公園——その樹陰じゅいん（こかげ）は、ひじょうに心地よく、市民は公園にやってくる。ひとときをすごすのである。

一 小説家・永井荷風と会う

反俗の作家といわれた永井荷風（一八七九—一九五九）が、日本郵船の船「信濃丸」にのり、アメリカにむかったのは、明治三十六年（一九〇三）九月二十二日のことであった。シアトルに着くと、タコマ（ワシントン州西部の港町）におもむき、父の知人の家にやっかいになりながら、



永井荷風



姉崎正治

地元の高校に入り、フランス語の初歩をまなんだ。ついでワシントンの日本公使館の小使い、ニューヨークの横浜正金銀行の行員となった。その後フランスのリヨンに転勤となり、明治四十年（一九〇七）の秋から翌年の春にかけて、この霧の町でくらしした。

明治四十一年（一九〇八）の春——姉崎正治（一八七三〜一九四七、当時東京帝大の宗教学の教授）は、リヨンのソーヌ河畔のホテルに滞在し、ゆうであった。かれは折からカーン資金という奨学金をえて、世界旅行中であり、リヨンに立ち寄った。永井は銀行の用件で客舎に姉崎（三十六歳）をたずねた。このとき姉崎は、上田 敏がイタリアよりパリに来たことを語った。

永井は上田と会ったことはなかったが、その著述を介して名は知っていた。とくに『太陽』『臨時増刊号』（第六巻・第八号、明治33・6）にのった上田の長編論文（第五部 上田 敏 文芸史 第二章 十九世紀の仏蘭西文学）（一七六〜一九九頁）によって、はじめてボードレールの『悪の華』のことが知ったのである。そればかりではない。この論文の影響によって、フランス好きになり、ことばを学んで、フランスの地を踏まんと決心した（「書かでもの記」）。

永井を触発し、かれをフランスびいきにさせた上田の文章とは、つぎのようなものであった。

シャル、ボドレイル（一八二二〜六七）が幽聳の（あやしく、そびえるの意か）鬼才は「悪の花」（二八五七）といふ詩集を以て病的作品を著はし、
深く近代の詩人を動かしたり。

「アルバトロス」の歌に詩人を海鵝（テホウドリの意か）に比べ、青雲のあなたに翔り（飛びまわる）嵐をあなたどるの長翼はあれど、地に下りては却

「て其^{その}為^{ため}に歩^{あゆ}む能^{あた}はずと歎^{なげ}き、「夕暮^{ゆふぐ}の調^{しらべ}」「破鐘^{やぶかね}」「梟^{きょう}」（ふくろう）「猫^{ねこ}」「人と海^{うみ}と」の歌に於て世に珍^{めづ}らしき奇^き詔^{じょう}の想^{おも}を吐^つけり（きはつな考^かえをのべた）。

（上田 敏がパリにいる……）

と思うと、かれの胸はさわいだ。

リヨンの銀行における『腰弁』の生活に飽きかぎっていた永井は、父に手紙をだし帰国することにし、そのまえにしばらくパリでくらすそうと思つた。かれの勤務態度を持てあましていた銀行は、明治四十一年三月五日かれを解雇した。

三月二十八日——永井はリヨンを出発し、パリにむかった。パリに着いたのは、深夜だった。リヨン駅にちかいホテルで二泊し、三十日に「ホテル・スフロ」（トゥーリエ街九番地、いまはアパルトマン）に移った。このホテルは、明治のころから日本人のひいきを受けた。当時はルーサージという人が持主であった。そのころ在パリの邦人があつまつて「パンテオン会」を組織し、会合の場所はこのスフロであった（小門勝^{おかどかつし}著『荷風パリ地図 下』散人出版会、昭和46・2）。

パリに来て、ラテン区のホテルに投宿したが、知人もいないし、上田の住所もわからない。これまで友なき境涯になれていたから、人を訪ねようという気もおきない。ただ街のあちこちを歩くだけの日々であった。

ある晩のこと、永井は元老院^{せうらういん}（リュクサンブール公園の北側）の前にある大通り（ヴォジラール街 *rue de Vaugirard* のことか）の左側にある「小紅亭^{こうせうてい}」（寄席^{よせ}——現存しない）に入った。そこは入場料の安い、パリ国立^{こんせつ}立^{りつ}高等^{こうとう}音楽^{がく}院^{いん}の学生^{がくせい}が演奏^{げんそう}する管弦^{くわんげん}楽^{がく}やオペラの断片^{たんぺん}などを聴かしてくる高^{たか}尚^{しょう}な演^{えん}芸^{げい}場^ばであった。

永井は客のなかに、日本人のような人物がいるのをみた。その者はイギリス風の背広を着、鼻メガネをかけていた。お互い視線はあったが、こゝとばを交すことはなかった。

翌日、永井はサン・ジェルマンの四っ角にある「パンテオン」というカフェで手紙をかいていた。すると向う側のテーブルに二人の日本人がいた。ひとりは一ッ橋にあった高師の附属中学校にいたときの二年うえの先輩、もうひとりは外国語学校の清国語科にいたとき知り合いになった仏語科の元学生であった。

松本 丞治（一八七七〜一九五四）…………… 中学校の先輩。当時、東京帝国大学法学部の助教授。商法研究のため英仏独に留学。のち関西大学学長、

中央大学教授。

瀧村 立太郎（一八七八〜？）…………… 東京外国語学校仏語科の卒業生。当時、同校の教授。

松本は上田 敏の下宿を知っていた。かれはその話をした。後日、永井は、あるレストランでコンセル・ルージュで顔を見あわせたあの日本人——上田 敏を紹介せられた。上田は永井より五つ年上の三十五歳であった。このときから二人のあいだに親交がはじまった。

上田は永井との出会とその後の交際についてつぎのように語っている。

——永井君にはたびたび逢いました。ある日舞踏を見に行きますと、観物中けんぶつちゆうに一人の日本人がいるのです。よく見るとどこかで見たことがあるやうなので、誰れだろうといくら考えてもわからない。そのごふとしたことである料理屋で紹介せられてはじめて永井荷風君だといふことが知れたのです。

それからたびたびいっしょにカフェなどへ行つて話したのですが、実にえらい人です。また若い人ですが、何でもよくわかつて、華やかな人です。あんな人がパリのような処へ行つていたら、おもしろいでせう。どうしてもわれわれとは一時代ちがうやふな気がします。近代人モダンです。帰つてから『アメリカ物語』を読んで感服しました（上田 敏「漫遊雑感」『趣味』第三卷第十二号所収、明治41・12）。

上田と永井は、お互いうちとけて、親しく交わつたということであろう。

人並みはずれた感受性と明敏さをもっていた上田にとって、米欧の世界は、どのように映つたのであろうか。ひとは旅をして、まず眼に飛び込んでくるものは、景色や人のうごき、風俗などである。

上田はアメリカを振りだしに、フランス・イギリス・ベルギー・オランダ・ドイツ・オーストリア・スイス・イタリアと、九ヶ国を駆け足で巡遊したのち、帰国までの約半年をパリですごした。

かれが米欧をめぐる歩いた「目的」はなんであったのか。それは留学といった堅苦しいものではなかった。はじめから研究風の儀式ばったものをつとめて避けたという。かれはふつうの旅行者のごとくすごしたのである。あえていえば、訪れる国々の市の「印象」や「感覚」をえようとしたという。

かれは短日間の旅行を要約して、

「草莽の野人（在野のぶこつもの）、布衣一書生（官位のない一学生）の旅行」

であったとのべている。

かれは帰国後、講話をするつもりで旅立ったのではなかった。ただ珍しいもの、おもしろい事柄を見るために旅行したという。ということとは、物見遊山の気持で旅にでたということか。

外遊から帰ってからの、かれの才気と生気にあふれた話は、やはり人を魅了する力があつた。上田の談話は、ふつうの旅行者の話とはだいぶ趣を異にしていた。外国の風景や人情、風俗をかたるにしても、ひじょうに観察がすどく、真実をついていた。それは聞く者の詩情をそそいだけばかりか、その場の情景を眼のまゑに再現してくれた。あたかもその地に行ってみる心地がしたらしい（佐々木信綱「柳村君の曇った顔」）。かれの描写力はひじょうに精緻であり、対象を生き生きと伝えた。手法は、絵画的でもあつた。かれは美を愛し、やゝもすれば華美に流れる傾向すらあつた。かれの写生力、色彩の美を「海」の描写にひろってみよう。

横浜を出帆した上田が、だんだん遠のく陸地のつぎに見たものは、海と空だけであつた。細かくいえば、海―雲―太陽―月―星などであつた。かれの視線は、それらの色彩や形にもそそがれる。まず太平洋の青い海をみ、ついでつるぎ色の黒潮をみる。船がハワイ諸島に近づくにつれて、海の色も変化し、青玉のようになる。上田の大好きな色のひとつである。

かれは太平洋と大西洋の海を比較し、太平洋の海は、緑がかった水色、大西洋のはやゝ黒く、はがねの色をしていると説く。日の出、月の出のようすにも違いはあるようだが、色あざやかな夕日や星が海に沈んでいくさまは、あたかも灯台の光のようにみえた。

上田は船にはつよく、船酔いしない人であつた。通過した所でいちばんおもしろいと思つたのは、アメリカに着くまでの太平洋の航海であつた。波が高く、船がかたむいても愉快であつたという。ドーバーの白い崖をみながら、対岸のベルギーのオーステンドにむかうとき、イギリス海峡の波のあらしを経験したが、船に酔うことはなかつた。

訪問した国々では、さまざまの光景をみて、しみじみとした気持になることが多かった。各国の印象をかいつまんで記そう。

「アメリカ」

アメリカの地を踏むまで、あまりよいとは思っていなかった。が、存外いいところであった。行ってみると、おもしろいところであった。サンフランシスコに上陸後、東行をつづけ、シカゴに二週間ほど滞留し、すすと煙のあいだから市街の雑沓を見学した。ニューヨークも似たところがあつたが、はつらつとしており、音楽や芝居にしても、ニューヨークに一シーズンおれば、たいいてい第一流のものがみられた（「漫遊雑感」）。

ニューヨークのマジソンの四つ辻——世界の富をあつめた繁華な場所に立って、イタリア移民のひく哀れなパイオルガンの細い声をきくと、近代文明の弊害をのろふかのような、切実な音楽にきこえた（佐々木信綱「柳村君の曇った顔」）。

大西洋を横ぎって、ロンドンへむかった。船がイギリスのポーツマス港に着いたら下船し、上京しようとしたが、夜半すこしすぎに寄港したので、めんどろになり、そのまま寝てしまった。翌朝、フランスのシェルブルール港に着き、上陸した。それよりノルマンデーの原野をすぎ、パリに到着した。

パリで一ヵ月ほどくらしたのち、イギリス海峡を渡り、ロンドンにいたり、十日ほど逗留した。ふたたび海峡を渡り、ベルギーのブリュッセル、オランダのアムステルダム、ドイツのベルリン、ドレスデン、オーストリアのウィーン、またもやドイツにもどり、ミュンヘン、ついでスイスのボーデン湖を横切り、チューリヒに至った。このときアルプス連山の風景をたん能した。

このあと、ハイネの句にある「イタリアというかの美しき花園」へとむかうのである。

このとき『古代美術史』（一七六四年）を著わした有名なヨハン・ヨーアヒム・ヴィンケルマン（一七一七〜六八、ドイツの美学・美術史家）のことを思い出した。かれはプロイセンのブランデンブルグの貧しい商人の家に生まれた。苦学しハレ大学に進み、神学をまなんだ。が、独学でギリシャの古典文学にしたしんだ。やがてイタリアかギリシャの美術を研究したいと思ったが、本国には研究材料がなかった。イタリアの美術の研究を志すうちに、だんだん齢をとり、中年をすぎてもその機会はなかった。

やがてローマの高僧の勧告にしたがい、カトリックに帰依し、ついに宿望を達し、一七五五年の秋——ついにローマに着いた。すでに髪に白いものがまじっていた。気ぬけがして、しばらくこの都でばんやりくらすうちに、何度ため息をついた。

（イタリアに来るのがおそすぎた。世に出ることもおそすぎた……）

やがてかれは夜役として研究を開始し、熱意をもって古代芸術のかけらや出土品を綿密に観察して、古代美術を再構築した。ヴィンケルマンは、近世における大学者であった。

「イタリア」

上田もまた「嶺南清明の地」（イタリア）をあこがれる東洋人のひとりであった。かれを乗せた汽車は、スイスを南下しつづけ、明るい空のミラノに着いた。ミラノでは聖堂やスフォルツアの古城などを見学したのち、四日目の夜——ヴェネチアにむかった。

夜行であったから、ロンバルディア（スイスに接す北イタリアの州）の車窓の景色は、昼間とは趣がちがっていた。左や右にみる田野、丘陵の「夜景」はことにおもしろかった。車掌に、

——ここはどこか？

と尋ねると、

——ガルダ湖（ロンバルディア州最大の湖）のちかくです。

と、いった。ローマの叙情詩人カトウルス（紀元前八四ごろ？～五四ごろ？）の故郷である。失意のうた、亡き兄をなげく歌で有名なところである。

春の夜は、眠ったように静かである。鳥も鳴かず、虫の音もきこえない。窓の外にみえるのは、「月あかり」に照らされた北アルプスの連山、田舎家の孤灯である。「星」は、夜のやみに金粉をまきちらしたように輝いている。

汽車は、夜半すぎるところ、ヴェネチアの駅についた。

ヴェネチアの印象。

家屋は水に臨んでいる。いや、海水につかっているといた方がよい。ふとヨーロッパの市街が洪水にあったらどうなるか、と考えてしまう。駅前から乗ったゴンドラに運ばれ、細い運河のあいだを抜けて予定の宿にむかった。戸口の石段を二つ三つあがってホテルに着くと、すぐに床についた。

翌朝、ゴンドラこぎの船歌で目がさめた。サンマルコ寺院、同広場、ドオジェの宮殿、なげきの橋、コレオニの銅像、さまざまの館などを見学した。のちの数日間は、ガイドなしで、裏道、細道を散歩がてら歩き、「街の風俗」をみてまわった。はじめは夢の世界にいるようであったが、



左がキーツの墓。右が友人セヴァーンの墓。[筆者撮影]

ものに即し、さわってみてはじめて幻想ミイジョウでないことがわかった。
フィレンツェの印象。

やがてヴェネチアを発し、ポー川（イタリア北部、同国最大の川）をわたり、月夜のなかアッペンニーノ・トスカーナ山脈（イタリア中北部）をすぎて、フィレンツェに着いた。ホテルは、サンタ・マリア・ノヴェラ教会のそばにあった。時候は春のはじめであったから、肌ざむさを感じたが、りっぱな建造物のなかに、のびやかな雅みやび（風雅）を感じた。フィレンツェ滞在ちゅう、始終美術やルネサンスのことばかり考えた。つぎに訪れたのはローマであった。

ローマの印象。

ローマに行くと、古今の治乱跡、帝国、人種、文明などのことばが脳裏に浮んだ。はじめはふつうの旅行者のように、旅行案内記のとおりに見物した。が、いちばん興味を引いたのは、「チメテロ・プロテスタント墓地」（ポルタ・サン・パオロ）に、英詩人シェレー（一七九二〜一八二二、イギリスのロマン派の抒情詩人）とキーツ（一七九五〜一八二一、イギリスのロマン派詩人）の墓をみたことであった。そこはカトリック教徒でない、外国人のための墓地——別名・「チエステイオ墓地」と呼ばれていた。

シェレーの墓は、門を入れて突きあたり、キーツのものは門を入れて左のほうのあき地に進み、しばらく行くと壁の一隅にある。そばには月桂樹があり、墓のまわりにスミレなどが植えてある。向って左がキーツの墓、右が友人ジョゼフ・セヴァーン（？〜一八七九）の墓である。上田は記念にすこしばかり、スミレを失敬してきた。両人は親友だったから、

（さみしいだろう。いっしょにしていればよいのに……）
と、くだらぬことを考えた。

ローマからさらに南下して、ナポリ（イタリア南部）に着いた。

ナポリとその周辺の印象。

ホテルは、ナポリ湾に沿ったサンタ・ルチア（中央駅の南西二・六キロに位置）にあった。翌朝、窓をあけると、目のまえにノルマン人の古城の跡、地中海の波、カプリ島、右のほうにソレント、ベズービオ山などがみえた。気候も景色もよく、見物するにはすべてつごうがよかった。眼に入るところはすべて巡覧することにし、ベズービオの火山——カプリ島——ポンペイの遺跡（ベズービオ山南麓、ナポリの南東二三キロ）——ポジリッポ（ナポリの南西にある半島）などを訪れた。

ポンペイでは、古代ローマ人の生活をしのび、ポジリッポでは、ヴェルギリウス（紀元前七〇〜一九、宮廷詩人。田園、農耕生活をうたった）の墓にもうでた。また海岸の公園にやすんだり、夕暮れともなると、馬車にてドライブに出かけた。

一 風景論

日本の風景のほうが、西洋のものよりもすぐれている。否、西洋の風景のほうが、日本のものよりもよい。このような景色についての東西比較論は、上田によると、粗大な考え（あらっぽくて、大まかな思考）だという。日本の景色がよくて、西洋のものは悪い、とすぐにいえないという。なぜなら、東西の風景は、種類がちがうからである。

日本人の自然にたいする眼（眼識の意か）は、日本絵（中国の古画——山水画、まきえ蒔絵）にある風景）から来ているという。アメリカやヨーロッパを見て歩いてわかったことは、いずこの国も、独自の景色をもっているということであった。アメリカの景色とヨーロッパの景色は、ちがうものであった。これよりかれの眼に写った各国の「風景の特色」をかいつまんで記るそう。

「アメリカ」

上田がアメリカに着いたときは真冬であった。北米大陸の一部は、冬景色であり、びょうびょう（果てしなく、広々としている）としていた。それは壮大の感をあたえた。かれは車窓から、広漠とした自然界もみただのであるが、主にみたものは、「都会」それも市の光景——建物（高層ビル）であった。

ヨーロッパの建築家は、アメリカの高層ビルは醜みにくい（みにくい）である、といっている。が、中にはじっさい醜なるものもあった。けれどじっさい見ると、ひじょうにおもしろく、一くせも二くせもある建築物であった。ブルックリンの橋のうえに立って、夜「摩天楼」をみると、電灯

をあてて輝しており、それは壯観であった。アメリカ文明の大規模なおどろいた。

アメリカは富があり、ゆたかな国であるが、文学や芸術といった精神的文明については、ヨーロッパを手本としている。真の文明という点からいうと、日本は古い国だから、すこしはましかと思える、という。アメリカ文明には、まだ落着いた、どっかりすわっているものがない、といった印象をもって、上田はアメリカを去った。

「フランス」

ノルマンディは、フランス北西部、イギリス海峡にのぞむ地方をいう。この地方の平野の緑草は、やわらかく、また細流はゆっくり流れていて、じつに神経のたかぶるのをしずめるにもっていい所の所であったという。「草」についていうと、日本の草は、すぐどす黒くなる。フランスの草は、日本のものよりもよいようだ。

フランスの草は、黄をたくさん含んでいるし、色合いもあざやかである。この国に草のうえに横たわる裸体美人の絵があるのは、草のせいだとおもった。

「気候」はどうか。冬はそれほど寒くない。夏は日本よりもずっとしのぎよい。パリあたりの気候はひじょうにおだやかである。対岸の国イギリスもそうだが、夏になると、昼間がながく、いつまでも明るい。夜の九時ごろまで、戸外があかるい。

だんだん日が暮れて、クレピュスキュルたそがれとなる。夕暮れするときも長い。日本はその点になると、夕方になると、急に夜になる。日本は夕暮れを味わうにはつこうが悪い。

上田は用のないとき、カフェのテラス（歩道に張りだした部分）で「夕暮れ色」をぼんやりながめたという。その色は、時がたつにつれて変化する。はじめは黄金の光の波——紫——スミレ色——青——と、刻々の変化をみせる。さいごは夜になり、星がひとつみえる。このときアルフレッド・ド・ミュッセ（一八一〇〜五七、フランスのロマン派の抒情詩人）の「夕ぐれの薄色の星」を思い出したという。

夕方、下宿の窓から、赤茶色の屋根がみえ、ある女性がそれを描いていたが、その光景はまるで印象派の絵のようであった。

「イギリス」

フランスのつぎに訪れたイギリスの印象については、ほとんど語っていない。国立美術館ナショナルギャラリー（ロンドンのトラファルガー広場にある一八三八年開設の美術館）でみた風景画家ターナー（一七七五〜一八五二）の絵に若干ふれているだけである。

「ドイツ」

上田によると、北ドイツはながく逗留せず、季節も冬であったから、風景はよくわからなかったという。しかし、ベルリンから南下する途中の景色は、おもしろ味があったという。オーストリアの景色は、ひじょうによかった。イタリアよりもふかい味があった。リンツ（オーストリア北部、ウィーンの西一九〇キロ）、ザルツブルク（オーストリア中部、ウィーンの西二九〇キロ）あたりのは景色は、絶景であった。

「イタリア」

この国は、景色がよいことで有名であるが、日本の景色とはまるで違う。第一あんまり青々としていない。はじめはすこし失望するという。しかし慣れてくると、つよい色彩、澄んだ空気、明るい光に品があるのを感じるようになる。やがてカサを広げたような松の木、糸杉などがありがたくなる。それらが白亜の建物とともに典雅の美をなしている。

「スイス」

この国の景色は、だれでも絵をみて知っている。アルプスの連山、氷河、湖水などが美を構成している。しかし、冬期であったので、じゅうぶんに美を探ることはできなかったという。上田によると、「風景美」というものは、山川草木のかたち、姿にあるというより、光線の変化できまるといふ。すなわち、形よりも光だといふ。これが上田の風景美論であった。

上田が行程を急いだのは、なるべくたくさん景色をみるためであったから、人情や風俗の深奥までさぐることはできなかったという。それをするには、五年、十年とながく足をとめる必要があるという（「滞欧所感」）。

上田はいつている。

「私は欧州の景色が好きだ。西洋の風景画はウソではない。実際の景色がそうである」

滞欧ちゅう、いちばん心地よく、かつおもしろかったのは、晩春から初夏にかけてのパリであった。ことに夕方から夜九時ごろまで——日没後まで——のたたずまいは、一幅の絵でもあった。

空の色——夕方の雲（上田は雲がすきであった。雲の美を愛した）——市街風景——木立のすがた——などは、何とも形容できぬ憧憬の心地を誘ったという。景色といえは、ふつう自然の山水をいうのであるが、パリでは街そのものが一つの興味ある景色をなしていた。たとえば、パリのある街頭にたたずまば、始終印象派の画布に収められそうな光景にふれることができるという（「西遊印象談」『早稲田文学』第37号所収、明治

むすび

上田 敏の自叙伝とみられているのが、小説「うづまき」(明治43・6)である。主人公・春雄は、敏のこととおもわれる。けっして高祿ではなかったが、父綱二の養子先は、幕臣の裔(ちすじ)であった。敏は幼いときから徳川趣味と異国趣味の感化をうけて育った。ことに海外の文物は、早くからあこがれの的であった。

「異(異域——よその土地)を好む情、これが春雄の小さい胸に溢れていた(「うづまき」という。

それは取りも直さず、外国の都市や人情について知るだけでなく、外国の書物をよみあさることであった。もし血統や遺伝やまわりの環境が、人間形成に大きな力をもつとしたら、上田 敏のばあいは、祖父から子、孫に伝わる形質——遺伝的性質と四囲(まわり)の感化はすくなくなかったはずである。その家系を祖父の代からしるすと、つぎのようになる。

祖父・上田友助(東作ともいう)

文久元年(一八六一)にヨーロッパに行った幕府使節団の随員。
身分は定役めいじやく「44歳」。

父・乙骨 亘(のち上田家に養子に入り

昌平齋の儒官・乙骨耐軒の次男。

綱二に改名)

叔母・悌子(母・孝子のいもうと、日本

明治四年(一八七二)岩倉使節団とともに渡米した女子留学生一行のうちの一人。のち医師・蘭学者——
桂川甫純の妻となる。

最初の女子留学生五人のうちの一人)

上田 敏は、単なる武士のちすじでなく、学匠の血統であった。かれは明治七年(一八七四)十月に、築地二丁目十四番地で生まれた。築地は埋立地であり、鉄砲洲(隅田川西岸の砂州——現・中央区湊町・明石町一带)から浜離宮庭園あたりの土地をふくむ。慶応三年(一八六七)から



上田 敏



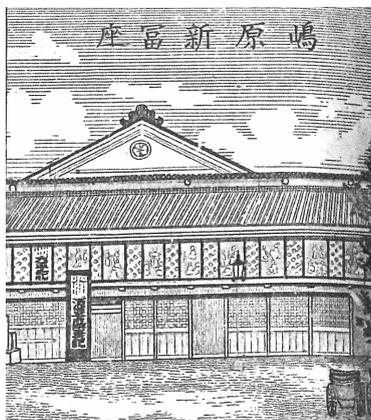
上田梯子
『東京朝日新聞』大正5・10・16付より。

明治三十二年（一八九九）まで、鉄砲洲に外国人居留地があり、そこは文明開化の先端をいく異人の街であった。「近世^{きんせい}外国人居留^{きよりゆう}の処^{しよ}となり商^{しょう}邸^{てい}宏^{こう}壯^{そう}貿易^{うまい}頗^{すぶ}る盛^{さか}なり」という。⁽¹²⁾

多感な少年であった敏は、おぼろげに子どものときのことを記憶していた。

- 一 生れた家の井戸のそばにあったうこんぎくら（別名・サトザクラ）。
- 一 家のまえを流れる築地川。
- 一 浜御殿（浜離宮の別称）の水門におっかぶさっていた大木。
- 一 月のさえわたった霜月（陰暦の十一月）に、逢引橋のうえに行く下駄の音。
- 一 新富座（明治五年「一八七二」に京橋の新富町につくった歌舞伎座劇場）のかえりに、どしゃぶりに会った晩のこと。
- 一 夏の夕方、水上警察の端艇^{パトロール}をみなながら遊んだ思い出。

祖父は幕末に遣欧使節の一員としてヨーロッパに行った人であったから、むこうでもらったり、また購入した品々が家に多少残っていた。そのころまた、かれの叔父（乙骨三郎——静岡学問所英学主任をへて海軍省の翻訳に従事）が、友人をつれて来ては、西洋のカルタあそびをやっていた。



新富座の図

また冬のある新月の夜——クリスマス・イブのとき、ある公使館（おそらくアメリカ公使館、明治七年「一八七四」アメリカ公使館は麻布善福寺より築地の外国人居留地一番地に移転した⁽¹³⁾）に、叔母（アメリカ帰りの梯子）とともに出かけ、背のたかい黒い服をきた外国人と握手をしたことがあった。さらに叔母がアメリカから持ち帰った本に、英文で書かれた大きな地理書があった。そこに各国の都市のさし絵があって、それを見るのがたのしかった。いちばん心をうごかされたのは、宏壮な建物や大通りではなく、さまざまな形の雲、雲の美しさであった。

当時は文明開化たけなわであったから、上田の家庭では、いつも学問のことや知識、文明、開化といったようなことばかり返された。欧化主義のただなかにおいて、子ども心に敏は、新文明にたいする愛慕の念をつよくしていった。

上田は欧行を機に、学問のあり方についてもいろいろ感想をえた。

かれは外国に行ったからといって、べつに文学の研究をやってきたわけではなかった。じっさいわずかの日数では何もできない。とくに文学の研究といっても、一年や二年外国でくらしただけからといって、そうできるものではない。書物をよむことは、日本でもできるから、せめて外国に行ったときぐらい、いろいろな方面を観察すべきである。人は一生にいちどでも、心になかった、いわゆる会心の作をつくれなかも知れないが、かりにつくれなくてもいいじゃありませんか。精いっぱい努力したものが、不向きであっても……

西洋にはえらい人もいれば、くだらぬ人間もいる。えらい人、教えを乞ふべき一流の学者もすくなくないという。ときどき卓絶した見識をもった人間が出るが、上田はなぜこのような人が生まれるのか考えてみた。

その答えは、こうだった。それは学問上の常識があるためだという。日本ではあまりにも早く専門家になってしまう。法律を勉強したら、すぐ民法なら民法、刑法なら刑法の専門家になる。が、これでは本物の学者にはなれない。それは単なる学問の技師、技手にすぎないのである。それでは学問をするにはどうしたらよいのか。上田によると、落ちついて一般のことをひととおり学んだら、じぶんの専門に入り、専攻する学問をふかめたらよい、というのである。すなわち、広く浅くてもよいから、いろいろな学問分野に興味をしめし、学んだのち、専門の勉強をふかめよ、というのである。かれはききと、このようなことを聞いたにちがいない。

西洋の学者は、じぶんの専門に多少関係ある学問、あるいは人生にいくらか交渉があるものに対

して、かなり知識をもっている。⁽¹⁴⁾が、日本の学者は専門以外のことには知らなくてもよいと考えている。これではとても大発見、大発明は生まれな
い。かの地では、実生活にすぐ役立たぬものでも、いつか成果が出るかも知れない、といった考えから研究を進め、金をつぎ込んでゆく。

その後の上田 敏。

明治四十一年（一九〇八、ときに三十五歳）九月五日——かれは日本郵船の「博多丸」にのり、ロンドンを出帆し、同年十月二十二日神戸に帰
着した。十一月京都帝国大学文科大学の講師となり、翌年教授となり、高等官三等に叙せられ、西洋文学第二講座を担当した。

上田はじぶんの洋行を総括し、「見物もせず、学校へも通はず、外国留学に一機軸を出したつもり」と妻に宛てて報じている（明治41・9・5
付、ロンドン出帆まえ）。かれの考えでは、美術や文学に志のある人は、留学や修行といった固くるしい意味でなくて、もっと広い、ゆったりと考
えから外国に出かけて欲しい、というのである（「西遊印象談」）。

帰国後、京都に行ったら、清閑せいけんをえて（世のなかのごたごたから離れて、静かに）勉強するつもりであった。京都にいけば、書をよむ時間やも
のを書く時間もあるはずであった。出国前に京大の岡田総長と会った折、——

——じぶんの職責（学校の職務）だけは果たしますが、それ以外には上京して演説（講演）したり、雑誌などに書くこともありましよう。
とっておいた。

京都の大学では、あまりにも学究的なことよりも、趣味（たのしみとして愛好するもの）のほうに重きをおき、英文学ばかりか、大陸文学など
も紹介して、すこしは物書きを育成してみたいと思った（「漫遊雑感」）。しかし、英文科の学生が専門の英文学にうとく、大陸文学を口にするの
はこまると、といさめた。またまじめな文献学上の研究の必要性をみとめ、その方面の大家や英文の達人な者が出て欲しいといった（瀧川規一
「上田先生を偲ぶ」）。

上田は歴史か国文学を専攻したい気もあったようだが、結果的には英文学をえらんだ。文学のなかでも「詩歌」をもっとも好んだ。
語学と文筆の才にめぐまれたほか、講話にも妙味があった。何より鋭敏な鑑賞眼をもっていた。「細心精緻」をその学風としたが、ドイツ流の
四角ばった、堅苦しい、理詰のやり方をあまり好まなかったようである。

上田は京都帝大文学科の才気非凡の花形スターであったが、惜しいことに四十三歳を一期に若死にした。筆者にとって上田 敏の名は、『海潮
音』ちゅうのカルル・ブッセの「山のあなた」とポール・ヴェルレーヌの「落葉」の名品によって、ふかく心に刻まれている。

さいごに敏の父・綱二は、慶応三年（一八六七）に徳川民部大輔（徳川昭武^{あきたけ}、一八五三〜一九一〇、幕末の水戸藩主）に随従して渡欧した、と
いった記事をよくみかけますが、これは誤りである。正しくは、池田筑後守一行につきしたがってである。……

注

- (1) 嘉治瑠璃子「祖父の写真（巴里だより）」『世界紀行文学全集 第二巻 フランス編 II』所収、修道社、昭和34・2
- (2) 嘉治隆一「乙骨太郎乙」^{定本}上田 敏全集 第一巻（教育出版センター、昭和53・4）の「月報 2」所収。
- (3) 「マイクロフィルム」

Correspondance Politique Japon Année 1864 [No.1] Tome II: Janvier-Juillet Duchesne de Bellecourt—Léon Roches.

注・日本使節団のリストは、草稿 (folio) 四六〜四七にある。

- (4) 杉浦愛蔵「奉使日記」『杉浦 讓全集 第一巻』（杉浦 讓全集刊行会、昭和53・3）、一五一頁。
- (5) 矢野峰人著『日本英文学の学統——道遙・八雲・敏・秃木』（研究社、昭和36・10）、一七四頁。
- (6) 同右。
- (7) 注(5)におなじ。
- (8) 安田保雄編「上田 敏年譜」『上田 敏全集 第十巻』所収、五六九頁。
- (9) 同右。
- (10) 注(8)におなじ。
- (11) 注(5)の一七五頁。
- (12) 谷壮太郎著『掌中東京名所図絵』旭昇堂蔵、明治14・4。
- (13) 川崎晴朗著『幕末の駐日外交官・領事館』（雄松堂出版、昭和63・3）、一四五頁。
- (14) 上田 敏「滞欧所感」『談話筆記』中央公論、明治41・12。

おもなる参考文献

『定本 上田 敏全集 全十巻』教育出版センター。

『文芸——故上田博士追想録』第七年第九号、大正5・9。

三浦義彰著『文久航海記』冬至書林、昭和17・5。

維新史学会編『幕末維新 外交史料集成 第六卷』財政経済学会、昭和19・1。

尾佐竹猛著『幕末遣外使節物語——尾佐竹猛全集 第七卷』実業之日本社、昭和23・11。

安田保雄著『上田 敏研究——その生涯と業績』矢島書房、昭和33・12。

『近代文学研究叢書 第十六卷』昭和女子大学光葉会、昭和36・2。